

韓国カトリック教会の成長に関する小考

徐 賢 燮

A glimpse into the growing Korean Catholicism

Hyun-seop SEO

Abstract

The tide of Catholicism first reached Korea in the 17th century, when copies of the Jesuit missionary Matteo Ricci's works in Chinese were brought back from Beijing by the annual mission to the Chinese emperor. The Korean scholars initially were curious about Western learning but showed no disposition toward the Catholic doctrine.

A particularly significant event occurred in 1784 when Lee Syng-hun, who had accompanied his father in a diplomatic entourage, returned from Beijing after being baptized by a Western Catholic priest.

Catholicism gradually found many of its converts among the faction of the Namin, who had little access to political power and were among the Chuingin class of technical specialists. This process occurred not through the proselytizing of Western missionaries but through the scholar's own efforts by reading treaties brought back from China.

On the other hand, the acceptance of Catholicism constituted a kind of challenge to the intellectual rigidity of Neo-Confucianism. The issue that brought to the surface Catholicism's challenge to the existing order shaking Korean society was the so-called Rites controversy.

This arose in consequence of a papal ruling in 1742 that ancestor worship and belief in Christianity were incompatible. Catholicism thus came to be suppressed on ritual grounds. In the course of the Catholic propagation in Korea, there were ten waves of prosecution including four major ones involving more than ten thousand martyrs from 1755 to 1876.

Korean Catholicism, however, witnessed a big growth in spite of a series of severe prosecutions. With the end of World War II, the Korean Catholic population started to grow rapidly. The Roman Catholic Church in Korea celebrated its bicentennial with a visit to Seoul by Pope John Paul II and the canonization of 93 Korean and 10 French missionary martyrs in 1984. In 2012, the number of Korean Catholics was officially put at 5,361,369, about 10.3% of the entire population. Today, Korean Catholicism blossoms by the dirt of the blood of martyrdom, being entrusted with a mission of spreading the truth to all parts of the world.

Keywords : Catholicism, Western learning, prosecution, canonization, martyrs

はじめに

韓国人の心には、原始的なシャーマニズム (shamanism) と自然神を崇拝する民族信仰、1500年余りに受容した仏教や儒教、そして朝鮮王朝後期に伝来したキリスト教が混在している。20世紀も後半に入ると韓国でも資本主義経済が大きく発展し、人々は物質主義の影響を大きく受けるようになった。まるでお金は第二の神と言わんばかりに、金は今日の韓国人の心を捕らえているようだ。多くの人々にとっては、お金がたくさんあって、立派な家に住み、良い着物を着て、おいしい物を食べて暮らすことができたら、つまり衣食住が十二分に満たされれば心豊かに暮らせるのであり、それに加えて立身出世がかなうならば錦上添花を添えることになるのである。とはいえ、韓国人の気質は本来宗教的であるため、すべての宗教に対して心が開かれていると言ってよい。韓国では、どんな宗教であれ、とりあえず店だけ開けば商売繁盛と揶揄されるほどに宗教が盛んで、宗教百貨店と呼べるような様相を呈している。韓国統計庁では10年ごとに宗教別人口現況を調査公表している。最新のデータは2005年11月現在の宗教調査であるが、それによると、総人口約4704万のうち仏教信徒は約1073万人(22.8%)、プロテスタント約862万人(18.3%)、カトリック約515万人(10.9%)である。プロテスタントとカトリック信者、すなわちキリスト教徒の合計は約1377万人、全人口に占める割合は29.2%として30%近くになる。だが、キリスト教と仏教を合わせても国民全体の半分程度であることを考えれば、儒教、新興宗教である円仏教、大巡真理会などの信徒の数も無視できない。韓国が宗教百貨店と言われる所以である。

上記の2005年の宗教分布を前回1995年の調査結果と比較してみると、プロテスタント教会の信者数がわずかながら(1.6%)減少している。対してカトリック信者は、1995年には全人口に占める割合が6.6%にすぎなかったが、2005年には10.9%に大幅に増加した。プロテスタント信者がカトリックに改宗した例も少なくないと分析される⁽¹⁾。韓国カトリック主教会議は毎年「韓国天主教統計」を公表しているが、同資料によると、2012年のカトリック信者数は約540万人、人口対比10.3%である。

日本のキリスト教徒の数は人口の1%をどうしても越えられない、いわゆる「1%の壁」があるといわれる。1%足らずの日本のキリスト教徒のうち、カトリック信者はさらに少数で約45万にすぎない。日本と比べると、韓国のカトリック信者の増加はまさに驚異的な現象で言える。

本稿は、1999年11月18日ザビエル渡来四百五十周年祭西日本委員会主催の「西日本宣教司祭大会の記念講演会」で金寿煥枢機卿が「韓国の福音宣教」という演題で行った講演に基づいて書き加えものである。当時筆者は福岡総領事として在任中、公邸で金寿煥枢機卿のための午餐会を行い、福岡在住の信徒らと共にご教示をいただいたことがあり、ローマ法王庁大使赴任の挨拶に行った思い出もある。

一. カトリックの伝来と迫害

1. カトリックとの出会い

韓国における前近代のキリスト教の歴史とは、すなわち天主教(ローマ・カトリック)の歴史である。日本では、キリスト教という言葉はカトリックとプロテスタントの双方を含むが、韓国では両者は厳密に区別されている。韓国では一般的にカトリックを天主教やカトリックと呼び、プロテスタントを基督教や改新教と呼んでいる。両者は使う聖書も異なっているが、唯一の存在である「神」に対する呼称にもわずかながら違いがあり、カトリックでは「ハヌニム」と呼び、プ

ロテスタントでは「ハナニム」と呼んでいる。

韓国と天主教との最初の出会いは、豊臣秀吉が朝鮮を侵略した文禄・慶長の役である。1593年にキリシタン大名小西行長（洗礼名アウグスティーン）の求めにより、日本で布教していたイエズス会（The Society of Jesus）⁽²⁾のスペイン人司祭グレゴリオ・デ・セスペデス（Gregorio de Sespedes, 1522-1611）が従軍司祭として朝鮮に渡航、約1年間滞在した。小西行長がセスペデスを招いたのは、将兵の中に長引く戦争に戦意を失って逐電・逃亡する者が続いたため、彼らをいかに管理し、士気を鼓舞するかに苦慮した結果であったという説もある。要請に応じて朝鮮に渡ったセスペデスであるが、残念なことに朝鮮人に対する布教はまったく念頭になかったとされる⁽³⁾。

文禄・慶長の役に関連のあるキリスト教徒として日本で名が知られているのは、おたあジュリアであろう。この戦役の折、朝鮮半島から小西行長が連れ帰った幼い女兒・おたあは、行長の妻ユスタによってジュリア（Julia）という洗礼名を持つキリスト教徒として育てられた。ジュリアはのちに数奇な運命に導かれて駿府の大奥に至る。彼女は徳川家康（1542-1616）から側室に所望されたが神の掟に背くと承知せず、キリシタン禁止令にも棄教を拒み、ついに伊豆七島の神津島へ流された。島では信仰を守りながら島民に献身的に尽くしたと伝えられ、その遺徳を偲んで1970年から毎年5月に「ジュリア祭」が盛大に行われている。

2008年の秋、筆者は東京・竹芝を夜フェリーで出航し、翌朝神津島に到着した。面積19平方キロ、人口約2000人の小さな島だ。短い滞在だったが、役場の関係者に案内して頂いて島を駆け回った。巡礼を気取るにはは慌ただしい旅で、まず「流人墓地」にあるジュリアのお墓を訪れた。韓国式の2重の塔のような墓碑に「田」の形の十字の文様が刻まれているのが印象的だった。島にある「おたあジュリア顕彰碑」や「ジュリア終焉の島」と記されている巨大な十字架などは、島民のジュリアに対する昔からの敬慕の念をうかがわせるものであった。神津島では、おたあジュリアに関する伝承が「オタアサマ崇拜」呼ばれる民間信仰とともに受け継がれている。ジュリアが朝鮮半島出身であることが広く知られようになってからは、韓国からの巡礼団もジュリア祭に参加するようになった。ただ、残念なことに神津島にはお寺や神社はあるが教会は存在しない。

7年間にわたる文禄・慶長の役の間には、陶工をはじめ5万人を超える朝鮮の人々が日本に連れて来られたが、そのうち7千余人が入信して洗礼を受け、その多くは後に殉教した。1867年7月7日、ローマにおいて、1617年から1632年の間で殉教した日本の殉教者205人が列福を通じて福者となったが、⁽⁴⁾その中には少なくとも9人の朝鮮人が含まれている。1610年、長崎居住の朝鮮人キリシタンたちが高麗町（現在の鍛冶屋町付近）に最初の朝鮮人教会を建てた。教会はスペインの殉教者聖ロレンソに捧げられたものであったが、徳川幕府が1614年1月に全国に禁教令を発令したことにより、1620年2月に取り壊された。しかし、だが、これらの史実は韓国教会史において直接的な影響は与えていない。

2. カトリックの伝来

1600年代前後の朝鮮時代、清国と行き来する使節団・燕行使⁽⁵⁾によって西欧の天文、地理などの科学書と共にカトリックに関する書籍が朝鮮に持ち込まれた。このような「漢訳西学書」は、北京を中心に活動していたヨーロッパの宣教師たちの手によって漢訳されたもので、当時の朝鮮知識人がそれまで接したことの無い文献であった。特に朝鮮の実学派の一部儒学者は、イタリア人のイエズス会士マテオ・リッチ（Matteo Ricci, 1552-1610）が中国布教のために中国語で著わした『天主実義』（初版は1603年北京刊）に魅了された。『天主実義』の題名は「イエス様に関するまこ

との討論」という意味であり、8編174項目にわたって東洋学者と西洋学者の対話の形をとった伝道書で、その内容に深い感銘を覚えた朝鮮儒学者たちは教理書を学問的に探求した。

ソウル近郊の京畿道の山の麓にふもとにある天真庵がその研究の中心であった。しかし、当時の朝鮮においてキリスト教は宗教として昇華された訳ではなく、「西学」と呼ばれる学問の域にとどまっており、信仰の対象ではなく研究の対象であった。この「西学」という言葉は、17世紀初め頃から中国で使われ始めた。イエズス会士はキリスト教とともに自然科学・天文・医薬・火器などの科学や実用知識をもたらし、しばしばこれらを総称して「西学」と呼んだ。朝鮮でも同様に、キリスト教を含む西洋の科学知識が「西学」また「天主教」と呼ばれることになった。

この西学が「天主教」として確立されたのは1784年である。李承薫(1756-1801)は、父の李東郁が1783年10月冬至使兼謝恩使の書状官として派遣された際、燕京使の随員として清国の北京を訪ねることになった。かれは北京の北堂でフランス人イエズス会のグラモン(Louis de Grammont, 1736-1812)司祭から筆談で教理を教わり、1784年2月朝鮮人として初めて洗礼を受けた。当時の北京には四つの天主教会があり、それぞれ東堂、西堂、南堂、北堂の名称で呼ばれていた。李承薫は朝鮮教会の盤石・創始者という意味でペテロ(Peter)という洗礼名を授けられた。まさに1784年は韓国のカトリック教会元年と言える年である。

李承薫は『天主実義』、『幾何原本』(ユークリッド幾何学を訳したもの)、聖画、黙珠、教理書などを得て1784年3月帰国し、天真庵で儒者と共にキリスト教の布教に努めた。やがて李承薫によって代洗(司祭に代わって洗礼を授けること)を受けて信者となる者が現れ始める。当初は朝鮮社会で権力から締め出された両班階層の南人や中人(チュンイン)⁽⁶⁾が中心であった天主教会が、民衆宗教として根をおろすようになったのは、迫害を避けて全国に分散した教徒が、天主信仰を農村社会に伝え、長期間にわたる勢道政治の下で虐政に苦しめられた庶民が、これを受け入れたからである。そして早くも加えられた迫害にも揺らぐことなく、わずか1年足らずで教会の基礎を固めることができた。当時の朝鮮教会では、外国の司祭によらず、信徒たち自らが自発的・能動的に教理を研究し信仰活動を行っていた。このような自主的受け入れは、キリスト教の歴史上類がないと言われている。

3. カトリック教徒に対する迫害と殉教

カトリックの伝道は中国と朝鮮の双方で祖先崇拜などの儀礼の是非をめぐる論争を引き起こした。マテオ・リッチは中国人に宣教する際、祖先を敬う儀式は宗教儀式ではなく本質的には中国の文化と関連がある儀式であると認めたが、教皇ベネディクトゥス14世(Benedictus XIV, 在位1740-58)は1742年、祖先祭事は迷信に基づいており、見逃すことはできないという理由でこれを禁止した。

朝鮮の信徒にとってカトリック受容の最大の問題点は、儒教的伝統に基づく祖先祭事が偶像崇拜だとして禁じられたことであった。教皇庁⁽⁷⁾による祭祀の禁止は、信徒の棄教や当局による迫害招く原因となった。1785年、ソウルの中国語訳・金範禹(キムボンム)(?-1786)の家では信者たちが日曜ごとに礼拝を行っていたが、金は官憲に逮捕されて殉教⁽⁸⁾した。彼は朝鮮最初の殉教者とされている。

1791年には、全羅道の珍山^{ちんさん}で尹持忠(1759-91)と権尚然(1751-91)が、祖先祭祀を廃して位牌を燃やした事件が起きた。尹持忠は自分の母親が死んだ時に母の位牌を燃やし、カトリック式の葬儀を行ったのである。朝廷ではこれを伝統や体制に対する重大な挑戦であると判断し、2人を処刑した上に、西学書を焼却処分した。これが朝廷による最初のキリスト教に対する迫害であり、辛亥教難と呼ばれる。前述の李承薫は珍山事件で捕えられて棄教を装った⁽⁹⁾が、1795

年に中国人神父の周文謨（1752-1801）が朝鮮に潜入すると彼とともに活動を再開した。しかし再度捕らえられて、1801年に殉教した。18世紀から19世紀半ばにかけて、朝鮮ではキリスト教迫害が頻発した。

当局による信者狩りは、百年の長きにわたって少しもゆるめられることなく続いたが、いったん人々の心に灯った信仰の火は消えなかった。むしろ迫害の最中にも天真庵の学者らを中心とする教会の指導者たちは、まだ教理を十分理解していないながらも自ら聖職者を選んでミサを捧げ、信者に聖体の秘跡（sacrament）や告白の秘跡を授けた。いわゆる仮聖職者制度を作り、司教、司祭を選んで立てたのである。指導者たちは、教理書を更に勉強して疑問が生じた場合には、北京の司祭に問い合わせをする有様であった。

この仮聖職者制度は、北京の司祭から禁止命令が出るまで続けられた。禁止令と共に聖職者の何たるかを知ることになった教会の指導者は、北京在住の宣教師に司祭の派遣を幾度となく要請したが、鎖国状態ではままたらぬことであった。1794年12月、中国人周文謨司祭が聖職としてはじめて朝鮮に入国し、様々な苦難に耐えながら伝道が続けていた。だが、1801年朝鮮政府は禁教令を出し、周司祭を含む30人以上の信徒を処刑し、400余名を遠島に処した。この事件は辛酉教難と呼ばれる。

信者であった黄嗣永（1775-1801）は、こうした弾圧を終息させて信仰の自由を得るために1万3千余字にのぼる書簡を北京に送ろうとしたが、計画は露見し彼は処刑された（黄嗣永帛書事件）。この帛書は朝鮮におけるカトリック弾圧の実情を訴え、これを中止させるためとしてキリスト教国による武力示威行動を要請する内容であったため、朝鮮政府はこれを大逆の罪とみなしたのである。政府はカトリックのみならず西学一般にまで弾圧を拡大し、五戸を一つの組として相互監視と連帯責任を目的とした五家作統法の制度を実施した。こうして、1834年に中国人劉方濟司祭が入国するまで、朝鮮教会はまたもや司祭不在の天主堂になってしまった。

一方、1831年9月、教皇グレゴリウス16世（Gregorius XVI, 在位1831-46）は、朝鮮教会からの司祭派遣の要請に答える形で、朝鮮教区を北京教区から独立させ、パリ外国宣教会に布教を任せさせた。1836年1月、最初のヨーロッパ人宣教師ピエール・モーバン（Pierre P. Maubant, 1803-39）が朝鮮に潜入することに成功したが、3年後の1839年、己亥教難において113人の朝鮮人信者とともに殉教した。朝鮮における最初のヨーロッパ人殉教者である。

しかし、身の危険を顧みず密かに朝鮮で活動した宣教師たちは朝鮮人司祭の養成にも力を尽くし、金大健（1822-46）、崔良業（1821-61）等3人の若者を選んでマカオのパリ外国宣教師学校へ留学させた。そのうちの金大建（洗礼名：アンドレア）は1845年8月17日、上海で教皇代理司教ルイ・ド・ベシ司祭から司祭に叙任された。朝鮮人最初のカトリック神父の誕生である。金大健はフェレオル司祭らとともに母国に密入国して布教に努めたが、1846年の丙午教難で殉教した。彼は40年後の1984年に聖人に列せられた。

1866年の丙寅教難では、フランス人宣教師9人と1万人近い朝鮮人信徒が迫害の嵐の中で命を失った。一世紀に及んだ迫害によって朝鮮では2万人を超す信者が殉教した。何とか逃れることが出来て生きのびた信者は、人里離れた山中に教友村と呼ばれる集落を作って隠れ住み、村で密に信仰を守り続けた。

上述の「辛酉教難」（1801年）、「己亥教難」（1839年）、「丙寅教難」（1866年）は「三大教難儀」または「三大邪獄」と呼ばれる。このような苛烈な弾圧が行われた背景には、当時の朝鮮の内政状況のみならず、朝鮮をうかがう欧米列強という国際情勢があった。「朝鮮の開国の過程でさらに不幸だったのは、朝鮮の伝統的儒教的価値観と相容れない天主教（キリスト教）がまず密入されたことであった。天主教は朝鮮の祖先に対する祭祀を一種の偶像崇拜と見なしたが、これは忠

孝を第一の徳目とする朝鮮人にとって、西洋人は禽獣に等しい人種であるという輩を改めて確信させる結果になった。また、天主のみを絶対者とする天主教の教義は王権の權威を失墜させる恐れがあり、班常（両班と常民）撤廢を前提とする平等思想は、当時の執権勢力の大勢を占める両班の地位に挑戦するものと見なされた。さらに、天主教の背後には西洋という外勢が潜んでいたことも否定できない。西洋の宣教師たちは欧米の侵略の尖兵ではないかとの危懼を抱かせたのである。⁽¹⁰⁾

辛酉教難の際の黃嗣永帛書事件は、朝鮮の為政者のみならず一般民衆にも「天主教の信者は国を狙う外国勢力の手先である」という誤解を生んだ。信者の多くは厳しい身分制度や貧しい暮らしの中でただカトリックの教えに心の平安を求めたに過ぎなかったが、そのような素朴とも見える信者たちがあくまでも背教を拒んで処刑され、死体は打ち捨てられた。

1984年、カトリック伝来200周年に教皇ヨハネ・パウロ2世（Joannes Paulus II, 在位1978-2005）⁽¹¹⁾が韓国を初めて訪問し、朝鮮王朝時代の殉教者103人を聖人に列した。200周年とは、前述した1784年の北京における李承薫の受洗から数えたものである。韓国では1989年にも再び教皇を迎えて世界聖体大会が開催された。ヨハネ・パウロ2世は、1981年2月に来日して東京、広島、長崎を訪れ、東京では昭和天皇、鈴木善幸首相と会見し、2月26日、長崎を訪問してキリスト教弾圧時代の26人に日本人殉教者である聖人を記念してミサを執り行った。

二、カトリック教会の発展段階

1. 1886-1950年

1886年、韓仏修好条約により、朝鮮における宗教の自由が部分的ながら認められた。フランス人宣教師を処刑したことで朝鮮とフランスの修好は遅れ、1882年の交渉は宗教と布教の自由を巡って合意に至らず、条約は1886年に至ってようやく締結されたのである。これによって長く地下に潜んでいた信者たちが、おそろおそろではあったが自らの信仰を公にするようになる。この年のカトリック信者は14000人余りとされるが、1866年から始まった丙寅教難の余燼がまだ残る状況下でありながら、この信者の数は驚くべきことと言わざるを得ない。さらに20年後の1905年になると信者数は6万4千人余りに増大した。

このような信者数増加の背景としては、養老院、孤児院、病院などの教会による社会事業、文盲をなくすことを目的とした教育事業などの影響があると思われる。また、教会内に限定されたこととはいえ、当時の人々にとって、神の御前では人は誰でも等しく一信徒にすぎないとする教えは、両班や常民（平民）といった厳しい身分制度による上下関係や、貧富の差による圧迫からの解放であり、その自由と喜びがより大きな要因として作用したと考えられる。

1906年以後、日本統治下30余年の間にも信者数はたゆまず増加し、1926年には10万人を突破した。1945年8月、日本の敗戦による解放時には南北の信者数は18万人を超えていた。植民地時代の日本と関わりがある朝鮮人信者の1人が安重根（1879-1910）である。1909年10月26日、ハルビン駅で朝鮮の初代統監・伊藤博文を射殺した安重根はトマスという洗礼名を持つカトリック信者であった。安重根はその場で逮捕されたが、伊藤博文が死亡したことを知ると「天主よ、ついに暴殺者は死にました。感謝いたします」と十字を切って神に感謝したという⁽¹²⁾。

1945年8月15日、解放と同時に朝鮮半島は38度線を境に南北に分断され、北朝鮮では共産党によって宗教が封殺されたまま今日に至っている。一方、完全な宗教の自由を得た韓国では、1949年の信者数15万人余から出発して、2008年までに30倍にも増加した。

2. 1950年代の朝鮮戦争期

1950年から1953年まで続いた朝鮮戦争によって国土は焦土と化し、人命の損失だけでも240万人に及んだ。これは、太平洋戦争における日本軍の損失255万人に匹敵する被害で、戦禍の苛烈さを物語っている。戦争が終わった後、カトリック教会は希望を失い失意の底に陥った国民の救護に乗り出した。アメリカ教会の社会援助機関であるCRS（Catholic Relief Services）から医薬品、食料品、衣類などの援助を受け、食べる物のない人々には救護食糧で飢えをしのがせ、父母や家族を失った子供や老人をシェルターに収容し、病に苦しむ人々には医療援助が受けられるよう助けて痛みを癒し、立ち上がることができず絶望に陥った隣人には神の愛を説いて勇気と希望をと励ました。このように戦禍に苦しむ人々に一筋の光を与える活動を続けてきたことが、1950年代におけるカトリック教会の成長に大きく寄与したと言える。

3. 軍事独裁政権期

軍事独裁政権の時代、政権は速やかな高度経済成長を政策目標として打ち立て、その結果、人間は商品価値としてだけの存在に転落した。人権はまったく無視され、物質万能主義と不正腐敗が蔓延した。この時期、教会は不正腐敗の追放を掲げて活動した。また、人権を蹂躪されている貧しい都市労働者たちに労働三権と人間の尊厳を悟らせ、彼らに代わって人権擁護運動にも積極的にかかわった。教会が人権擁護と社会正義実現のための指導的役割を果たすようになったのは、当時、暴圧的な軍事政権に敢然と立ち向かうことのできる人や組織が他になかったからであった。

イエス・キリストのように、カトリック教会は世にあって世と共に生き、働き、すべての人々に仕えるように努力したわけである。キリストが自らの血の代価を払って救った人間の尊厳は、政治や経済や、いかなる権力によっても蹂躪されてはならない。この精神に基づいて、教会は、キリストのように人々の救いのためには、自らの生命をも犠牲にする覚悟がなければならないという認識であった。

カトリック教会は、人権運動と社会運動において主導的役割を担うことによって信者たちの強い支持を受けるようになった。その結果多くの韓国人がカトリックに関心を寄せ、カトリック教会が社会的に信頼と影響力を持つようになった。キリスト教の信者でない韓国人であっても、韓国の民主化においてカトリック教会や果たした役割は評価している。1990年代、プロテスタントの教徒はその数を減らしたのに対し、カトリック教徒の数は増加したが、カトリック教会が積極的に民主化闘争に参加した影響もあるものと思われる。

カトリック教会の韓国の民主化運動において中心的な指導者だったのが金寿煥枢機卿（洗礼名：ステファノ、1922-2009）であった。金枢機卿は、70年代の維新体制、80年代の第五共軍事独裁体制下の暗黒の時代に韓国の民主化運動に貢献し、保守・進歩の陣営や地域主義、階層、宗教の違いを問わず全ての人々に尊敬された韓国の精神的支柱であったといっても過言ではない。

1971年4月、金枢機卿は朴正熙大統領の強圧的手法を批判し、選挙を公正に行うよう要求した。同年のクリスマスメッセージの生放送では朴大統領が長期独裁を目指していることを批判し、朴大統領本人がその中継を聴いて激怒し、放送を中止させたほどであった⁽¹³⁾。当時、韓国では大統領を批判することは大変な危険を冒すことであったため、金枢機卿の勇氣ある発言が一躍注目されたのである。

1972年、朴正熙大統領は司法・立法・行政の三権が大統領に集中する「維新体制」を断行し、民主化を求める反対勢力を封じ込めた。1976年3月1日、ソウルの明洞聖堂で行われた「3.1独立運動」記念ミサにおいて、独裁体制に反対する「民主救国宣言」が読み上げられた。1987年6月、全斗煥政権下において民主化を要求していた学生デモ隊の300名余りが警察に追

われて明洞聖堂に逃げ込み、約1週間にわたって籠城した。当時の政府は学生たちを引き渡すよう要請したが、金枢機卿はそれを拒否し、逆に政府に対して警察が学生たちの安全を保障するよう申し入れた。政府がこれを受け入れたため、学生たちは逮捕されることなく聖堂を出た。このような政治的社会的状況にあって、明洞の聖堂(cathedral)⁽¹⁴⁾は、虚偽と不正と不義に敢然と立ち向かい、この世の闇を照らす灯台のような存在となって今日に至っている。

4. 1990年代から現在

80年代も終わり頃になると、教会はそれまでとは様相を異にする新たな問題に直面するようになった。それは、経済成長をもたらす弊害であった。相次ぐ好景気の下、マイカー時代が到来して車を乗り回すようになると、人々は物質的豊穡の甘美さに幻惑され、精神的糧を軽んじるようになった。そして、ひたすら現世の安逸と快樂を求めるようになった。豊かな物質文明は霊的存在としての人間をむしばむ畏でもあった。いずれにせよ、物質主義に陥っていく人々のなかにキリストの占める場が無くなっていくのは当然なことと言えるだろう。

ここに至り、教会は深い自省と共に、信者再教育プログラムの強化をはかる一方、「小共同体運動」などの計画をし実行に移した。また、教会内外への積極的な宣教の目的でラジオ・テレビ放送局(平和放送)の運営、既存のカトリック新聞とは別に平和新聞を発行、カトリック大学を総合大学に拡大再編成するなど、少しでも多くの若者にキリスト教精神に基づいた教育の場が与えられるよう努めた。

90年代後半、タイから始まったアジア通貨危機はたちまち韓国にも及んだ。バブル経済の蜃気楼に惑わされて物質的豊かさを謳歌していた政府や国民にとってはまさに晴天の霹靂であったが、これは神の警告、いや、神の下された機会であったかもしれない。国人も夢から醒め、改めて自分を振り返って見るようになったからである。とはいえ、韓国経済が通貨危機によって受けた打撃は甚大で、多くの中小企業が倒産し、失業者が続出した。教会はすぐさま行動を起こし、失業者のため「憩いの家」を開き、仕事や住む家のない人々のための無料給食所や貧しい子供たちのための勉強室を増設するなど、直接的な支援を行った。

教会は、80年代から継続して毎年100～150人の神父を新しく養成し、15万人内外の新しい入信者に洗礼を授けるようになった。2012年末現在、韓国カトリック教会は、17の教区に1664の教会、7つの神学校(司祭を目指す学生1540人が在籍)を運営し、韓国人司祭は4578人、信者数は約540万人に及んでいる。全人口約5188万人に対するカトリック教徒の割合は約10.3%である。⁽¹⁵⁾これは神の恵みであり、同時に、殉教した祖先の犠牲の賜物とも言える。特に韓国の信者たちは殉教した祖先に対する信心の念が格別に高く、彼らに従って信仰深く生きようと努めているようだ。

三、韓国カトリック教会の特徴

韓国のカトリック教会は急成長を遂げながら、その過程でおのずから幾つの特徴を持つようになった。

1. 教会の大型化

急速な信者の増加に司祭と教会の数が追いつけず、1つの教会に所属する信者の数は全国平均で3千350人に及ぶ。人口の多い都市部ではさらに数が増え、最大のソウル教区では1教会が6200人の信者を有する。

2. 女性信者の増加

信者の性別構成比率は、男性 41.4%に対して女性は 58.6%で、他宗教に比べて男女差が大きい。女性信者の活動は教会内外で大変活発であり、かつ献身的である。しかし、家庭の中で女性 1 人だけが信者である場合には男性信者に比べて教会を離れる比率が高いなど、何らかの対策が必要と考えられている側面もある。

3. 都市化現象

韓国の人口の都市集中率は 65%であるが、全国の信者の 70%が都市部に居住している。その例として、ソウル教区の福音化率（人口に対するカトリック教徒の比率）が 10.2%であるのに対して農村地帯である安東教区の福音化率は 4.7%に過ぎない。ソウル教区の信者は韓国全体の信者の 26%を占めし、首都圏（ソウル、仁川、議政府、水原）教区に拡大すると、ここに属する信者の割合は全国の信者数の 55.9%を占めている。

4. 中産階級化

カトリック信者は比較的学歴が高く、中産階級の者が多いと言われている。これは信者が都市部に集中していることと関連がある。ソウル教区の中でも富裕層が多く「富村」と言われるソウル市お江南^{カンナム}では福音化率が 20%を越える地区がある反面、江北^{カンピョ}の低所得層が多いところでは 5%にも及ばないと言われる。

5. 青少年信者の減少

15～19 歳の若い信者の増加率は、全年齢層の信者の増加率の半分にも及ばない。中・高生の日曜学校の出席率は非常に低く、中学生の出席率が 21.6%、高校生は 11.7%に過ぎない。韓国は世界に名だたる学歴社会、競争社会であるため、上級学校への進学は彼らの全てとなっている。高校生の上級学年は大学進学や社会に出るための準備に追われるため、若者としてもっとも苦悩する時期でもある。教会は、人格形成に重要な思春期にある彼らの進路を共に模索し、苦悩を分かち合うことのできるよう努めるべきであろう。司祭になりたいと希望する青少年の数も次第に減っている。

6. 収支の透明化

教会の使命への自覚的参加と自己の生活を捧げる信仰の表明として、教会に金銭を奉納することを献金と呼ぶ。聖職者の生計の維持、伝道や慈善事業の資金、教会運営などの目的に用いられ、信者の義務としての定期献金と目的に応じての任意献金がある。韓国では毎月の収入の十分の一を献金する熱心な信者も少なくない。カトリック教会とプロテスタント教会と合わせると、両教会への年間献金総額が韓国の国家予算の十分の一に達すると言われる。

韓国では宗教団体は公益のために働く非営利団体と見なされているため、宗教団体の免税に法的な規定はないものの、実際には非課税とすることが慣例化されている。国税庁は宗教団体の納税に関しては宗教人の自律に任せるという政策を取っているが、カトリック教会は 1994 年の司祭会議で納税することを正式に決定し、収支の公開も始めた。最近一部のプロテスタント教会もこれにならって納税するようになっている。

四. 福音宣教の主役たち

1. 信徒使徒職的活動

福音宣教とはただキリスト教の教理を教えることではなく、言葉と行いによってイエス・キリストの福音を全世界に宣べ伝えることを意味する。福音とは直訳すると「良い知らせ」だが、「」という意味である。

現在、韓国には信徒使徒職団体と呼ばれる多くの組織がある。キリスト教徒でない人たちには信徒使徒職とはなじみがない言葉かもしれないが、すべての信者は洗礼と堅信の秘跡（サクラメント）とによって等しく教会の使命に与り、単に「教え導かれる者」にとどまらず、自らも福音宣教の使命を果たしていくことを求められる。このような使命を信徒使徒職と呼ぶ。

韓国の信徒使徒職団体を大類すると、まず、団体の設立目的に従って活動するレジオマリエ、クルシルリョ運動、聖霊カリスマ運動、ビンチェンシオ・ア・パウロ会、都市貧民使徒職団体などがある。

二つ目は、各種学校、公共団体、会社などの職場内の信徒使徒職団体である。三つ目は、職種別の法曹人会、言論人会、芸術人会、商工会、教授会、学生連合会、カトリック労働青年会、カトリック農民会、女性連合会、カトリック運転手使徒会などで、あらゆる分野の業種を網羅すると言ってよいほどの使徒職団体がある。これらの使徒職団体の多くは、週1回あるいは月1回に開催する会合を通じて福音宣教に力を注いでいる。構成員数も多く、例えばレジオマリエ(Legio Mariae)の正会員はソウルで7万人余、光州で2万5千人であり、賛助会員を合わせると20万名が福音宣教と信仰からさめた信者の回心を目指す活動の大きな力となっている。

2. 葬礼の取り仕切り

韓国カトリック教会には、200年もの間続いてきた葬礼習慣がある。信者の家庭で喪が発せられた場合はもちろんのこと、代洗（臨終の洗礼）の場合でも、葬礼委員会が遺族と協議して葬礼に関わる一切を取り仕切る。通常3日から5日にわたる喪の期間中、教会の使徒職団体が24時間途切れることなく交代で煉禱（^{ヨンド}慰霊の祈り）を捧げ、訪問客の案内や接待の他、あらゆる手配をすべて委員会で引き受ける。このため遺族は煩雑な手続きに忙殺されることも弔問客の相手に気を使うこともなく、故人の枕辺で静かな気持ちで喪に服することができる。こうした葬礼の風習はカトリックならではの美しい風景として好感を持たれ、宣教にも大きく貢献している。

3. 聖書の集い

長期にわたって聖書を学ぶ「聖書40週間」や「聖書100週間」など、新・旧約聖書の全般的学習や特定のテーマを主題にした聖書学習などが各教会や各教区別に活発に実施されている。青年聖書の集いもソウル教区をはじめとして、かなり活発に行われている。

さらに、信者たちの新しい福音化のための信者再教育に力点を置いており、待降節（アドベント。クリスマスまでの準備期間）や四旬節（復活祭＝イースターの準備期間）には外部から講師を招聘して特別講演会を行うなど、機会あるごとに開催される団体や小共同体別の講演を通じて信仰を固めている。

4. 小共同体運動

前述したような教会の大型化は司祭の事務負担の過重を招き、交わり、仕え、分け合うという教会共同体の機能を弱体化させ、司祭は単なる教会の行政管理者に、信者は典礼の客体、あるいは

は群衆の一単位へと転落するという恐れをもたらした。ここから個人主義や匿名化が登場し、信仰が弱まり教会から離れる者の増加、秘跡や典礼参列の減少などの現象が生じた。このような弊害を克服し、教会共同体の正常な姿を回復するための方案として登場したのが「班の集い」などの小共同体運動である。小共同体の活性化のために最も大きな妨げとなる年齢、貧富の差、職業、社会的地位、学歴の格差を克服し、更に、個人主義や、利己主義の挑戦に対応できる方法の準備が重要である。

5. 海外宣教

韓国内にとどまらずにアジアをはじめ世界各地への宣教を目指す意識はまだ高いとは言えない。2012年末現在、韓国から海外に派遣されている司祭は209名、修道士72名、修道女688名である。彼らは世界78ヶ国に派遣されているが、韓国の教会の中で海外宣教に対する熱意はそれほど高くない。

しかし、中国への宣教だけは別で、中国に対してはかなり意欲があるように見受けられる。中国に派遣されている韓国人宣教師は現在103人で、これは中国に派遣された外国人宣教師の出身国別で最多の人数である。中国は何と言ってもその人口の多さによって全世界への宣教を目指す上できわめて重要な国となっている。しかし、中国は法的には宗教信仰の自由を認めているが、その宗教は外国勢力の支配を受けないことと規定されているため、実際には中国政府の公認を受けた教会しか活動が許されない。中国での宣教には厳しい制約と大きな困難が伴う。しかし、「カトリックの伝来」の項で述べたように、韓国は中国から福音を伝えられたため、中国への宣教を目指すことはその恩返し的心からでもある。

まとめ

韓国カトリック教会が、19世紀に殉教の血でもって韓国の土地に種を蒔き、20世紀に芽生えて育ったキリストの教えについて、新しい二千年期が始まる21世紀には豊かな果実を結んでほしいと望む心情には切実なものがある。「三大教難」の残虐さ苛烈さ、捕縛され拷問を受ける信者たちの悲惨な有様、それでも子どもでさえ背教を拒んで従容として死についた彼らの信仰があればこそ、現在のカトリック教会の発展があることを彼らは忘れていないからだ。

ソウル大教区は2020年までにカトリック信者が全人口の20%に達することを目指して「2020年運動」を展開している。現在の10%強を10年足らずで倍増させるには右肩上がりでは信者数を増やさなければならず、容易なことではない。だが、これまで述べてきたような教会と信者たちの努力によって目標達成の可能性は十分にあると言えよう。

韓国と日本のカトリック（Catholic）教会の歴史を見ると、日本にカトリックが伝えられたのは1549年であるが、朝鮮は日本より200年以上後の1784年にカトリックの布教が開始された。伝来初期に続いた厳しい迫害によって多くの殉教者を出したという点では、日本のカトリック教会と韓国のカトリック教会は類似している。しかしながら、現代における教会の成長という点では両国には大変大きな差があるように思われる。

現在、日韓の関係は極めて残念な状況にある。しかし韓国と日本は、かつてキリスト教徒が為政者による弾圧を受け、多数の殉教者を出したという共通の歴史を持つ。日本と韓国の教会がお互いの歴史を学び、一時不幸な関係にあった両国の和解と協力のために、キリストにおいて兄弟である我々が何らかの役割を担うことができるよう望んでやまない。

幸いなことに、両国の教会は1990年代以来、韓日主教交流の集いと韓日青年交流の集いなど

を通じて相互理解の増進にたゆまず努めている。2004年集いで共通の歴史認識の作業の一環として歴史副教材の発刊を決意し、同年『若者に伝えたい韓国の歴史』が刊行されたのは特記すべきことである。第18次の主教交流の集いは2012年11月、新羅の古都・慶州で開催され、宗教に限らず核の問題など幅広く意見交換を行った。青年交流会も年1～2回韓国と日本交替で開催され、相互理解を増進している。今後、このような場を広げ、両国のカトリック教会が国境と民族の壁を越えて、キリスト的な平和と愛の分かち合いの精神に基づいたよい隣国の関係構築に大いに貢献することを期待する。

注

- (1) 浅見雅一・安廷苑『韓国とキリスト教』、中公新書、2012年、16頁
- (2) カトリック教会の中の男子修道会の一つ。1534年イグナティウス・デ・ロヨラがザイベルほか数人の同志とともに結成し、1540年ローマ教皇パウルス3世によって認可された。会員は教皇に特別の忠誠を誓って、その要請に応え、そのつど教会に最も必要とされる仕事に従事することを特徴としている。
- (3) 五野井 隆史「被虜朝鮮人とキリスト教」東京大学史料編纂研究紀要第13号、2003年、49頁
- (4) H. チースリク監修・太田淑子編『日本史小百科キリシタン』、東京堂出版、1999年、41頁
福者とは徳ある行為あるいは殉教により、その生涯が徳性に特徴づけられるものであったことが教会より宣言された者。福者の地位にあげられることを列福と言う。その後さらに詳細に調査されて成人に列せられる場合もある。
- (5) 燕行使は、朝鮮が清の北京に派遣した国家使節であり、丙子胡乱で朝鮮が清に降服した1637年から1894年甲午改革まで約250年続き、その回数は500回以上に及んだ。朝鮮は日本に通信使を送る際には同時に清に燕行使を派遣して3国の国際交流を結び、日本には清国の情報を知らせ、清国には日本の動向を伝えた。燕行使に対して、清から朝鮮に派遣された使節は勅使と呼び、その派遣は1644年以来151回、延人員351人に及ぶ。
- (6) 中人(チュンイン)とは、両班と常民の中間に位置する身分で、科擧の雑科に合格し、通訳(中国語、モンゴル語、女真語、日本語など)、医学、法律、算学、音楽、絵画などの技術系官職に従事した下級官吏である。中人は実務や内外情勢に明るく、開化思想の持ち主が多かった。
- (7) ローマ・カトリック教会の首長とその座を、日本では「法王」「法王庁」と呼ぶが、一般的にカトリック教会や韓国では「教皇」「教皇庁」という呼称を用いている。イタリア語では Santa Sede、英語では Holy See。語義的に正しくは「聖座」と呼ぶべきだが、本稿では一般的名称である「教皇」「教皇庁」をそのまま使用した。
- (8) 殉教(Martyrium・ラテン語)とは「証言する」「証人になる」「証し」の意味であり、自己の信仰する宗教のために迫害される時、それを放棄しようとせず、むしろ死や苦難を恐れずその犠牲になって証することをいう。
- (9) 浅見雅一・安廷苑、前掲書、69～70頁。
この中で、李承薫がこの教難の影響によって流刑に処せられ、棄教したと言われると記している。しかし韓国の天主教界では、彼は棄教を装ったのであり、「外斥内守」「外背

内信」をもって自分の内なる天主信仰を守り抜いたと評価している。

(韓国教会史研究所編集、『韓国天主教会に信仰の流れと課題』、2013年、13頁)

- (10) 徐 賢燮『近代朝鮮の外交と国際法受容』、2001年、明石書店、22～23頁
- (11) 2002年3月14日、筆者は「駐教皇庁大韓民国特命全権大使」として教皇ヨハネ・パウロⅡ世に信任状を奉呈した。一国を代表する大使の職務であったが、一カトリック信者としてはこの上ない喜びであり光栄であった。単独謁見 (papal audience) の際、教皇は2度の韓国訪問と金大中大統領のバチカン国賓訪問に触れる一方、南北関係の進展の可否に対する関心を表明した。
- (12) 大貫 隆・名取四郎・宮本久雄・百瀬文晃編『岩波キリスト教辞典』、岩波書店、2002年、58頁
- (13) 浅見雅一・安廷苑、前掲書、123～124頁。
- (14) ソウル大教区座カトリック明洞聖堂は韓国最初の本堂で、韓国カトリック教会の象徴である。ここに信仰共同体が形成されたのは1784年、明礼坊という宗教集会からである。1945年には光復を記念して教会名をカトリック鐘岷大聖堂からカトリック明洞大聖堂に変更した。1980年代現代史の激動期に韓国社会の人権向上および民主化の聖地としての役割を果たし、現在では祈って宣教する共同体として世に向かっている。
- (15) 韓国天主教主教会議編『韓国天主教会総覧』、韓国天主教中央協議会、2013年、634頁